

英国における明治時代の日本研究と書物交流： 日本文学の本格的な紹介（翻訳）の前段階として

コヤマ ノボル
小山 騰

「英国における明治時代の日本研究と書物交流」という題でお話する。副題に「日本文学の本格的な紹介（翻訳）の前段階として」が付いており、今日お話するのは、日本文学の代表的な古典、たとえば源氏物語などがアーサー・ウェイリーなどにより本格的に翻訳され、きちんと紹介される前の段階の話である。具体的にいえば、日本研究の歴史について簡単に触れた後、日本語書籍の輸出、特にジャポニズムに関連する日本の書物の輸出、そしてアーサー・モリソンという英国人の小説家が、ロンドンで日本の美術品を収集し、日本美術の研究を進める過程でかなり高度の日本語能力を習得していたことなどをお話する。話の構成としては、日本研究、日本語書籍の輸出、アーサー・モリソンというようなかたちになる。一見するとあまり関係のない話題が三つ並んでいるが、日本文学の外国における本格的な紹介・研究につながる歴史的な流れになると思う。

一. 日本研究

日本研究の変遷については、個人的な考えでは、次のような歴史的な経過を考えている。国学→日本学→日本研究、英語でいえば、Kokugaku または National Learning、Japanology そして Japanese Studies となる。日本学 Japanology と日本研究 Japanese Studies との違いについては、日本学 Japanology は人文科学を中心とした伝統的な研究分野、たとえば、語学、文学、歴史、宗教、

民俗などが中心であるのに対し、日本研究 Japanese Studies の場合、それらの伝統的な日本学の分野に付け加えて、社会科学の分野、たとえば社会学、経済学、政治学なども含まれると規定する。時代的には、大まかにいえば日本学 Japanology は明治時代から始まり、日本研究 Japanese Studies は第二次世界大戦後に始まったと考えている。日本研究の場所の問題でいえば、国学はもちろん日本で発達した学問である。日本学は最初日本で誕生・発展し、それから外国に移動する。日本研究は原則として外国における日本についての研究ということができると思う。日本学および日本研究が外国で行われる部分で、書物の移動が関連している。書物の交流は日本研究が行われる場所とも深く関係している。

日本研究の場所の問題に触れたので、次に、私がお話する内容について、おおまかに時代と場所を設定しておく。時代は明治時代である。ただ、話の都合上、明治時代の前後、すなわち幕末および大正初期を含む場合もある。大正初期とは、第一次世界大戦前までのことである。いずれにしても、経済史などの分野では、第一期グローバリゼーションと呼ばれる時代である。蒸気船や汽車などの蒸気機関による交通、および電信などによる通信の発達により、それまで比較的孤立して発展していた世界各地が、交流を盛んにし始めた時期である。その第一期グローバリゼーションの時代に世界に君臨した大国は、大英帝国と呼ばれた英国である。第一期グローバリゼーションを、英国を意味する「アングロ」と「グローバリゼーション」を併せて、「アングロバリゼーション」と呼ぶ研究者さえ存在する。日本は幕末の開国をへて、第一期グローバリゼーションの時代、すなわち明治時代に地球規模で広がる有機的な活動の一環として近代的な世界に組み込まれる。今日私が話をする場所は、その第一期グローバリゼーションの時代の日本と英国である。

明治時代に入ると、日本と英国などの欧米諸国との間で、人、モノおよび情報の交流が盛んになる。書物はモノと情報の両方に関係している。その書物の交流も、日本と欧米を中心とする外国との間で、人の往来および貿易などが増

加するとともに急速に発展する。また、第一期グローバリゼーションの時代、すなわち、明治時代になると、今まで比較的未知の国であった日本が国際社会に引き込まれ、それまで鎖国などを通じて独自に発展したユニークな文化が世界に紹介される。開国後、外国人もその日本の文化、具体的には日本語、日本の歴史、日本の美術、日本の宗教、日本の文学などを研究し始める。いわゆる日本学の開始である。もちろん、外国人による日本学の中心となるのが、日本語の習得および日本語そのものの研究である。外国人による日本研究で重要な役目を果たすのが日本の書物である。現在もそうであるが、日本は昔から出版が盛んな国で、すでに江戸時代にも多くの本が刊行され、また同時に写本も多く存在した。いずれにしても、日本は書物が多い国であった。日本に書物が多かったことが、外国人による日本研究が急速に進展した理由である。

開国以前にも、イエズス会の会員、オランダ人などによる日本語研究がすでに存在した。幕末・明治時代における本格的な日本研究は、領事館員や外交官、お雇い外国人、宣教師などとして日本に滞在した外国人から始まった。英国人アーネスト・サトウ、ウィリアム・ジョージ・アストン、バジル・ホール・チェンバレンなどがその代表である。日本語の研究および日本研究に関していえば、明治時代以前にも、日本にはすでに日本の古典研究を契機として発展して来た国学が存在した。国学を一言で表現するのはむずかしいが、あえて書物との関係で省略化すると、漢籍を研究するのが漢学、蘭書、すなわちオランダ語の本を研究するのが蘭学、和書すなわち和文の書籍を研究するのが和学・国学である。国学にとって書物は大変重要で、近代以前においては、書物を通じて日本語を体系的に研究して来たのが国学であった。簡単に想像することができるよう、日本研究のパイオニアである英国人サトウ、アストン、チェンバレンたちが日本で日本学を開始した時、国学から多くのことを学んだのである。事実、アストン、サトウ、チェンバレンなどは堀秀成、林甕臣、鈴木庸正、橘東世子などの国学者または国学を学んだ人々に師事したり、それらの人々を教師にしたこともあった。

アストン、サトウ、チェンバレンなどの英国人を中心とした日本研究のパイオニアたちが自分たちの研究発表などの拠点にしたのが、明治5年に横浜に設立された日本アジア協会、英語でいえば the Asiatic Society of Japan である。日本研究のパイオニアたちによる日本研究の成果も、おもに「日本アジア協会紀要」(Transactions of the Asiatic Society of Japan) などに発表された。そもそも、その日本アジア協会は、まさに日本における近代的な学会の濫觴にあたる。近代的な学会は日本研究のパイオニアたちが始めた日本アジア協会が発点であった。

国学と日本研究の誕生・発展との関係について、チェンバレンは日本アジア協会で次のようなことを発表している。それは、チェンバレンが代表的な国学者本居宣長について、明治17年(1884年)に次のような紹介を付け加えた部分である。

本居は近世日本が生んだ最も偉大な学者・著作者で、伊勢の松阪で1730年に生まれ、1801年に亡くなった。(中略) 実際、本居の位置はあまりにも傑出しているので、おそらく我々の協会の会員で彼が書いたものについて少なくとも間接的なものを含めて何も知識を持っていない人はほとんどいないし、ここ十年間に日本について外国人により出版された本格的な書籍のほとんどが、本居について言及している^①

チェンバレンによれば、日本アジア協会のほとんどの会員が本居宣長が書いたものを知っており、明治7年から明治17年の十年間に外国人によって日本について出版されたほとんど本が、本居宣長のことに言及しているという。チェンバレンの証言により、国学の代表的な学者である本居宣長が、いかに外国人の日本研究者に大きな影響を与えていたかのかを知ることできる。

ここで、明治時代の少なくとも前半の日本研究について指摘しておきたい点がいくつかある。まず、日本研究のパイオニアたちは英国人などの外国人であ

り、研究成果は英語などの外国語で発表された。しかし、研究の拠点は日本アジア協会などがある日本であった。また研究の主要な資料などは日本語の書物などであった。日本の書物についていえば、重要な点は本居宣長などの国学者が自分たちの研究成果をすでに出版という形態で発表する手段を持っていたことである。外国人による日本学が生まれた時点で、国学者などの日本の学者による研究成果が、外国人にも書物というかたちで手に入ったのである。

日本学にとって日本の書物が大変重要であったので、実際にアーネスト・サトウ、アストン、チェンバレンたちは、自分たちの日本研究のために日本語の書籍を多く収集した。特に、アーネスト・サトウは日本語書籍収集家としては傑出した存在であった。またその当時、日本の書物は比較的安価に手に入れることができた。水谷不倒によると、明治初期から明治十五、六年頃までは、古書受難の時代で、和書はほとんど価値がなかった時期であるという。幸運にも、サトウたちは和書が極端に安い時期に収集をしたのである。また、日本アジア協会についていえば、活動の目的として次の三点を掲げていた。すなわち、日本および他のアジア諸国に関係する情報を収集し、調査すること、図書館や博物館を創設すること、紀要などを出版することの三点である。図書館の創設は、日本アジア協会の三大目的の一つであった。その日本アジア協会の図書館についていえば、日本アジア協会は日本に関する洋書は積極的に収集したが、日本語書籍については不思議なことに偶然寄贈などで入ってきた例外を除いてほとんど収集しなかった。要するには、当時の日本では和書を含めて日本語書籍は安価に入手することができたので、日本アジア協会の各会員が自分で収集すればいいと考えていたようである。それほど、明治時代の日本では外国人にとっても和書などは簡単に手に入ったのである。要するに、洋書については図書館が必要であったが、和書については図書館は不要であったのである。

二. 書物の移動

次に、話題を日本における日本学の誕生・発展の問題から、日本の書物の外

国への輸出の問題に移す。唐突な感じを受けるかもしれないが、すでに述べたように、外国人による日本学の拠点が日本から外国に移動するのに関連して、日本の書物も外国に移動した。サトウやアストンなどが収集した日本語書籍の移動については、サトウやアストンなどの日本学のパイオニア自身が英国に戻ったので、彼らの蔵書も英国に移動した。日本の書物が日本から外国に移動する点、特に日本語書籍の輸出については、外国人による日本学のために日本語書籍が外国に輸出されたという面も多少あったかもしれないが、後で述べるように、実際には広い意味のジャポニズムすなわち日本趣味の流行と関係している事象である。この時期の和書などの日本語書籍の移動については、日本の美術品の外国への移動と関連させて把握する必要がある。書物には情報を運ぶ器という側面と、単なるモノとしての側面がある。後者に焦点を当てれば、日本の美術品や骨董品などとあまり変わらなくなる。いずれにしても、結果として外国人による日本学が外国に移動した時期に、日本の書物も外国に移っている。そのことが書物の輸出などから判明する。

次に問題となるのは、書物の移動などという文化的事象をどのような手段で把握するのかという点である。他に適切なものがないので、私は貿易統計を使用する。『日本貿易精覧』や『大日本外国貿易年表』などの統計を使って説明する。

まず、最初、金額ベースによる書籍の輸出入をグラフにしたものをお見せする（図1）。期間は明治13年から大正元年までである。実線が輸出を表し、点線が輸入を表す。このグラフからわかることは、書籍の輸入との比較で書籍の輸出が想像以上に多いことである。輸出された書籍のほとんどは日本語で書かれたものであると思う。通常、日本は洋書などを輸入して、欧米文明を積極的に摂取し、急速に近代化を進めて来たと理解しているので、書籍の輸入が多いことは簡単に予想することができる。しかし、書籍の輸出がこんなに多いとは予想外である。年によっては、書籍の輸出が輸入を上回る場合もある。たとえば、明治38年、40年、41年、42年、43年には、書籍の輸出の金額が輸入の

書籍輸出入（金額）（日本貿易精覧）

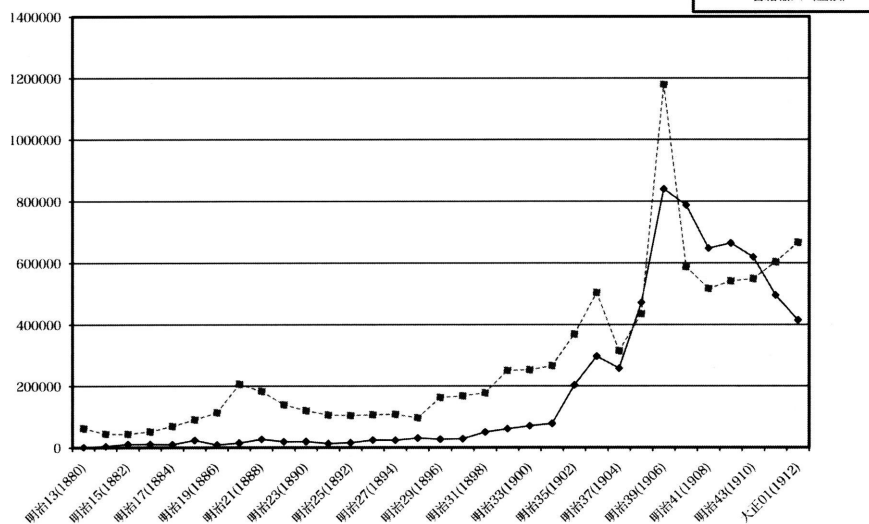


図 1

金額を上回っている。

次に冊数をベースにした書籍の輸出入をグラフにしたものをお見せする（図2）。実線が輸出を表し、点線が輸入を表している。念のために付け加えると、書籍の貿易統計で書籍の冊数が表示されるデータはあまり多くない。書籍の輸出入で冊数がわかる場合、データが得られる期間は限られている。このグラフの場合、期間は明治13年から明治32年までの20年間である。冊数をベースにしたグラフでも、書籍の輸出が予想以上に多いことがわかる。このグラフでも、明治18年には書籍の輸出が輸入を上回っている。金額ベースで書籍の輸出が輸入を上回っていた明治38年、40年、41年、42年、43年の冊数をベースにしたデータはないが、もしあったとすれば、書籍の輸出が輸入を上回っていた可能性が十分にある。いずれにしても、以上の二つのグラフから明治時代の日本は、想像以上に書物を輸出していたことがわかる。

次の表は、日本から輸出された書籍のデータで、冊数がわかる明治13年か

書籍輸出入（冊数）（日本貿易精覧）

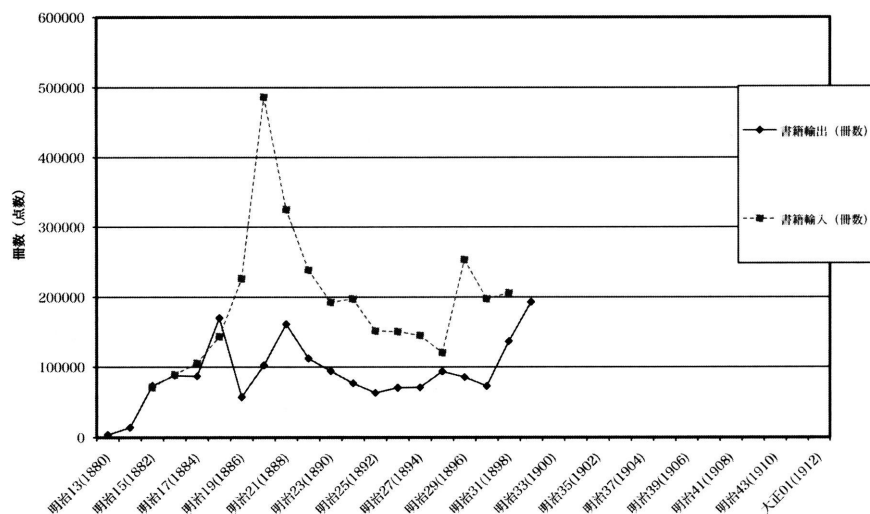


図 2

ら明治 32 年までの 20 年間に、英国を含むヨーロッパ諸国に一体何冊の書籍が日本から輸出されていたのかを国別に表示したものである（図 3）。輸出金額も参考のために付け加えた。なぜ、対象としてヨーロッパ諸国を選んだのかといえ、ヨーロッパ諸国では日本語を読解することができる人がごく少数しかいなかったからである。日本人移民などが存在するアメリカ合衆国や、同じ漢字圏に属する中国などの場合には、日本語書籍を書籍として読む可能性が高くなる。しかし、ヨーロッパでは、日本語書籍の読者数は皆無またはごく少数に過ぎなかったので、日本語書籍はほとんど書籍として読まれていなかったと思う。以上の理由で、ヨーロッパを対象に選んだ。この表によると、明治 13 年から明治 32 年までの 20 年間に、英国は合計十七万九千冊弱の書籍を日本から輸入した。その合計金額は五万七千円強に上る。金額の大小を判断するのはむずかしくなるので、この場合、冊数だけに焦点を合わせる。私の個人的な意見では、英国に輸入された日本語書籍の合計冊数十七万九千冊弱、年平均九千冊

日本からヨーロッパへの日本語書籍の輸出
1882年(明治15年)―1901年(明治34年)
20年間(大日本外国貿易年表)

国名	冊数	金額(円)
イギリス	178,990冊	57,135.71円
フランス	126,321冊	64,667.12円
ドイツ	52,650冊	31,810.95円
ロシア	11,007冊	2,014.71円
イタリア	3,544冊	2,359.36円
オランダ	1,547冊	2,095.08円
デンマーク	1,512冊	310.00円
ベルギー	1,073冊	380.95円
オーストリア	914冊	555.00円
スイス	804冊	3,994.00円
合計	378,362冊	165,322.88円

Noboru Koyama, 'How many books were imported into Europe from Japan',
EAJRS newsletter, No. 1 (Autumn 1990)

図 3

弱という数字は、大変大きなものである。たとえば、現在毎年ケンブリッジ大学図書館が購入する日本語の書籍はせいぜい千冊から二千冊の間である。最近の状況は千冊強といった数字になる。英国の他の図書館も似たような冊数の日本語書籍を購入していると思う。現在、英国で日本語書籍を積極的に集めている主要な図書館は四つか五つで、それらの主要な英国の図書館が年間に購入する日本語書籍の合計冊数はおそらく数千冊で、せいぜい多くても一万冊には届かない。そのような図書館などがまったく無い時代に、英国が年平均九千冊弱の日本語書籍を購入していたというのは驚きである。また、ヨーロッパ全体で

明治 13 年から明治 32 年までの 20 年間に、合計三八万冊弱の日本語書籍が輸入されていたというデータも、想像以上の数字である。いずれにしても、日本語書籍の読者が皆無かまたはほとんどいないヨーロッパに、想像以上の日本の書物が輸出されていた。その事実が貿易統計などからも見てとることができる。

明治 13 年から明治 32 年までの 20 年間に、英国が年平均九千冊弱の日本語書籍を購入していた中には、おそらく大変多くの和書が含まれていたと思う。また、みなさんもお存じのように、近代的な書籍に比べて、和書または和古書は冊数でいうとかなりかさばるので、書籍の冊数もかなり増加する。

ここで書物の輸出との関連で、広い意味のジャポニズムすなわち日本趣味の流行にごく簡単に言及してみたい。ジャポニズムすなわち日本趣味に関連して日本から外国に輸出された品物は多岐にわたっており、もちろん、その中には和書なども含まれていたと想像する。しかし、それらの品物を貿易統計などで把握するのはなかなか困難である。一つの例として、英国が輸入した骨董品の統計をお見せする（図 4）。使用した統計は The Annual Statement of the Trade of the United Kingdom with Foreign Countries and British Possessions で、日本語に訳せば、『連合王国と外国および英国領との貿易年報』というような名称になる。いずれにしても、その英国貿易統計により 1900 年（明治 33 年）から 1913 年（大正 2 年）までの 14 年間に、英国が日本から輸入した骨董品の金額を表示する。また、同じ表で英国が外国から輸入した骨董品の全輸入金額の中に占める日本の割合と、日本が英国に輸出した全部の輸出品の全金額の中に占める骨董品の割合も一緒に掲示する。英国が外国から輸入した骨董品の中で日本が占める割合は、年平均 65.62 パーセントに上る。多い時には、たとえば 1900 年（明治 33 年）の場合、日本の割合は 86.59 パーセントにも上る。いずれにしても、英国が輸入した骨董品については日本からの骨董品が相当高い割合を占めている。さらに付け加えると、これは金額ベースをもとにした統計で、フランスなどのヨーロッパ諸国からの骨董品に比べると、日本からの骨董品は単価そのものが大変安かったと考えらるので、量としてはおそらく膨大な

英国が日本から輸入した骨董品

The Annual Statement of the Trade of the United Kingdom with Foreign Countries and British Possessions

年	輸入金額	日本が占める割合	骨董品が占める割合
1900(明治33)	£139,438	86.59%	9.05%
1901(明治34)	£132,679	75.45%	7.25%
1902(明治35)	£130,262	74.07%	6.86%
1903(明治36)	£103,124	75.47%	4.53%
1904(明治37)	£83,406	80.23%	3.55%
1905(明治38)	£105,731	74.88%	5.36%
1906(明治39)	£146,470	64.99%	4.80%
1907(明治40)	£134,352	64.70%	4.06%
1908(明治41)	£91,779	68.74%	3.07%
1909(明治42)	£109,194	63.67%	2.95%
1910(明治43)	£117,032	60.05%	2.70%
1911(明治44)	£62,602	43.45%	1.85%
1912(大正1)	£73,091	43.72%	1.86%
1913(大正2)	£75,955	42.63%	1.73%

図 4

量の骨董品が日本から英国に流入したのではないかと考えている。実は骨董品（英語でいえば Curios）に関する統計概念は、1900 年（明治 33 年）にはじめて導入されたものである。日本からの広い意味の美術品およびそれに類したものの洪水に悩まされた英国の税関が、骨董品という新しい概念を導入して日本からの輸入を処置したと思う。また、日本にとっても骨董品は日本から英国に輸出した品物の中でも重要な位置を占めており、絹織物、銅製品、麦稈真田に次ぐ重要な輸出品であった。以上、表示した日本から英国に輸出された骨董品の統計からも、日本から英国に輸出された書物の大部分が広い意味のジャ

モニズムいわゆる日本趣味の流行に関連するものであったことが想像できる。

三. アーサー・モリソン

a. 大英博物館

日本アジア協会が日本において日本学の誕生・発展に大きく寄与したように、英国における日本学の発表の場などとして重要な役割を果たしたのは、ロンドンの日本協会であった。英国における当時の日本学がジャポニズムの影響を大きく受けたように、ロンドンの日本協会も日本に関係するさまざまな分野を含んでいたが、その中心となったのはやはり日本美術関係であった。一方、大学における戦前の日本学・日本研究については、英国はヨーロッパ大陸の諸国に比べて遅れていた。英国の大学における本格的な日本研究は、実質的には第二次世界大戦後に始まった。それ以前にも日本研究に関連した散発的な動きはあったが、本格的な日本研究にはいたらなかった。一応 1916 年に設立されたロンドン大学東洋学院（現在の SOAS）にも日本語コースも存在したが、しかし、日本語で卒業した学生が一人あったかどうかという状態であった。いずれにしても、日本学の時代（すなわち第二次世界大戦以前）には、英国で実質的に日本研究の拠点として機能したのは大学ではなく、どちらかといえばむしろ大英博物館であった。大英博物館は 1973 年に英国図書館が分離するまで、博物館と図書館の両方の機能を持っていた。日本学・日本研究との関連でいうと、広い意味での日本の美術品も、また和古書を含む日本語書籍も、実質的に図書館と博物館の両方を兼ねる大英博物館に収蔵されていた。その大英博物館における日本美術の二大コレクションが、ウィリアム・アンダーソン・コレクションとアーサー・モリソン・コレクションである。アンダーソン・コレクションは 1881 年（明治 14 年）に大英博物館に収蔵された。モリソン・コレクションについては、まず浮世絵が 1906 年（明治 39 年）に、続いて絵画が 1913 年（大正 2 年）に大英博物館に入った。アンダーソン・コレクションの収蔵に尽力したのはオーガスタス・フランクス、そしてモリソン・コレクションはローレン

ス・ビンヨンの骨折りにより大英博物館に収納された。

フランスおよびビンヨンの二人は、ともに大英博物館の日本美術コレクションの発展に寄与した大変重要な人物である。ビンヨンは多才な人物で、詩人、美術史家、美術評論家などとして活躍した。ビンヨンは大英博物館ではプリント・ルームに勤務し、東洋版画・素描部の部長であった。大英博物館の東洋版画・素描部は、部長であるローレンス・ビンヨンとその部下であるアーサー・ウェイリーの二人の職員で構成されていた。二人とも詩人肌の人物で、大英博物館で浮世絵や日本の絵画などが、ビンヨンとウェイリーという詩人も兼ねる学者に管理されていたというのも不思議な奇縁にあたる。

さて、その詩人、美術史家、美術評論家などして有名であったローレンス・ビンヨンと親交があり、日本美術研究のために大英博物館に出入りしていたのが、小説家アーサー・モリソンである。モリソンはもともと小説家であったが、割と早い時期から大英博物館などを拠点にして、浮世絵などの日本の美術品の収集、さらには日本美術そのものの研究にのめり込んで行く。もちろん、アーサー・モリソンの日本美術研究の拠点は、大英博物館で、日本美術を中心としたモリソンの日本学・日本研究は、ある意味では後年同じ大英博物館に勤務したアーサー・ウェイリーが独学で日本語を学び、『源氏物語』を翻訳し、本格的に日本文学を英国に紹介する段階に至る過程のようなものを示唆している。そのような理由から、ここでアーサー・モリソンの日本の美術品の収集および日本美術研究に焦点を当ててみたい。

b. ロンドンのイースト・エンド

アーサー・モリソンは1863年ロンドンのイースト・エンドで生まれ、1945年まで存命であった。享年、81才であった。年齢からいえば、モリソンはビンヨンよりも6才ほど年上、ウェイリーに対しては25才ほど年長になる。また、モリソンが生まれ育った場所であるロンドンのイースト・エンドは、当時貧民窟などがあるところとして有名であった。モリソンは初歩的な学校教育を

受けた後、17 才の時に、ロンドンのイースト・エンドにある「人民の殿堂」、英語でいう People's Palace という教育・娯楽機関で、書記として働いていた。その場所で、同年代のハロルド・パーレットという人物と知り合いになり、二人は生涯を通じての友人となった。ついでに申すと、二人ともフリー・メーソンの会員であった。ハロルド・パーレットは日本語通訳生見習として日本に出かけ、日本にあった英国公使館などで、領事館員や外交官などとして勤務した。パーレットの最後のポストは大連の英国領事であった。ハロルド・パーレットはアーネスト・サトウやアストンなどの後輩にあたり、日本研究者としてもサトウやアストンの次の世代にあたる。パーレットは同僚のホバート・ハムデンと二人で、アーネスト・サトウと石橋政方が編集した『英和口語辞典』を改訂・編集し、『英和口語辞典』の第三版や第四版を出版したこともある。モリソンにとって、パーレットは日本美術品の収集および日本語能力の習得にとって、大変重要な友人であった。

モリソンは、1891 年 27 才の時、ロンドンのイースト・エンドの生活について短編を『マクミランズ・マガジン』(Macmillan's Magazine) という雑誌に発表した。その短編が当時新聞の編集者として活躍していた W.E. ヘンレーの注目を引き、ヘンレーはモリソンにさらに多く話を書くように激励する。詩人・文芸評論家として有名になるヘンレーは、有望な若い作家を見つけ出すことでも知られており、ヘンレーに見いだされたウィリアム・イエーツ、ジョージ・バーナード・ショー、ラドヤード・キップリング、H.G. ウェルズそしてアーサー・モリソンたちは“ヘンレーのレガッタ”と呼ばれていた。もちろん、英国の有名なボート・レースである“ヘンレー・レガッタ”にちなんだ洒落である。モリソンはヘンレーの勧めでロンドンのイースト・エンドについて書いた短編などをまとめて“Tales of Mean Streets”(貧しい街の物語)として出版し、これがモリソンの出世作となる。モリソンの他の重要な小説としては、“A Child of the Jago”(ジェイゴ街の子供)、“The Hole in the Wall”(壁の穴)、“To London Town”(ロンドン・タウンへ)などの作品がある。モリソンはま

たマーチン・ヒューイトという探偵を主人公にする探偵小説も書き、そのヒューイトはコナン・ドイルのシャーロック・ホームズのあとを追いかけた最初の注目すべき探偵であるといわれる。モリソンは写実的な小説を書くところから、英国のエミール・ゾラにもたとえられたほどである。しかし、モリソンは割と早い時期から自分の情熱を文学ではなく、日本の美術品収集・研究に注いでいたようである。そして、モリソンの浮世絵および日本の絵画収集、さらにそれらの自分が収集した作品を材料にした日本美術研究の集大成は、1911年（明治44年）に刊行された二冊本の大著『日本の絵師』（Painters of Japan）に結実した。モリソンの『日本の絵師』（Painters of Japan）については、先駆者の仕事として高く評価され、長年にわたり東洋美術研究の重要な参考書として取り扱われた。また、モリソンの『日本の絵師』（Painters of Japan）の一部を翻訳し、『日本の浮世絵師』として昭和5年に出版した山名格蔵は、モリソンの著書を「かの岩佐又兵衛の研究家として東西に知悉されてゐる英国のアーサー・モリスン氏の一九〇五年に公けにされた、現在は稀覯本に属し、異常の高値を呼ぶ『日本の画家』（The Painters of Japan）といふ、フォーリオ版の世界的大著」^②として紹介している。

c. 浮世絵と日本の絵画の収集

もうすでに述べたように、アーサー・モリソンは小説家であったが、著作活動についてはどちらかといえば自分の主要な収入源としてとらえていたようである。情熱はもっぱら趣味である日本の美術品収集およびその研究にそそいでいた様子である。そのモリソンの有様について、クラレンス・ルークは1897年（明治30年）に刊行された『チャップ・ブック』（The Chap-Book）という雑誌に、次のようなことを書いた。

彼は書くことがあまり好きでないように思う。彼は自分の趣味で無為の時間を過ごしたり、趣味に関心を払うことに楽しみを見い出している。その

彼の趣味というのは、日本のもの、特に日本の版画をすべて集めることである。彼のラウトンにある家の壁は、それらの版画でいっぱいである。ダイニング・ルームは広重だけを集めており、広重の絵が三列に掲げられている。引き出しが付いた机の中は版画でいっぱいである。訪問客が興味を示せば、モリソンはしまっている場所をくまなく探し、日本語の題辞を翻訳するであろう。心の底から自分の趣味を追求しているので、彼は日本語を習得することもいとわないのである。たとえ、まる一日モリソンと一緒に過ごしても、あなたが話題をロンドンのイースト・エンドに戻さない限り、モリソンがアジアのイースト・エンド以外にはまったく興味を持っていないと思うであろう。^③

同じ文筆家であるクラレンス・ルークが証言するように、アーサー・モリソンは日本の美術品、特に浮世絵の収集、さらにはそれらの研究に彼の情熱をささげ、そのために日本語までも学んでいる。同様に、同じ文筆家で、日本に関する著作もあるダグラス・スレイドンも、モリソンは日本絵画収集に熱狂的であると書いている。スレイドンもモリソンも同じサベージ・クラブの会員であった。

では、その小説家モリソンがなぜ浮世絵などの日本美術品を収集し始めたのであろうか。まず、考えられるのは W.E. ヘンレーの影響である。ヘンレーは 1881 年から 1886 年まで『マガジン・オブ・アート』(The Magazine of Art) という美術誌の編集長をしていた。その時に日本美術に関係するいくつかの記事を書いた。またジャポニズムの影響を受けた画家として知られるジェームス・マクニール・ウィスラーの友人であり、支持者であった。詩人としても、ヘンレーは「豊国の錦絵についてのバラード」などを作詩している。

アーサー・モリソンが日本美術品の収集・研究にのめり込んでいった、もう一つの重要な理由は、日本の美術品は収集することができるという点である。浮世絵などの日本の美術品は収集可能または収集しやすいというのが、ある意味

では大きな特長になっていた。ジャポニズム（日本趣味）の流行も、収集可能または収集しやすいという点が重要であった。モリソンの浮世絵の収集については、次のような興味深いエピソードが残されている。ケネディ・ウィリアムソンが W. E. ヘンレーについて書いた回顧録からの引用である。

モリソンがウォッピングやライムハウスにある船員が立ち寄るはしけの飲み屋などで新しい、すばらしい浮世絵を見つけた時、モリソンは自分の発見にあまりにも興奮してヘンレーの家に戻ったので、たとえその時が真夜中を過ぎていても、ヘンレーの家中の者が眠っていたのに起きてきて、モリソンと一緒にその発見を喜ぶのであった。^④

この話は、膨大な数の浮世絵を収集したモリソンにとっては収集初期の頃の話であろうと想像する。もちろん、モリソンが本格的に収集した浮世絵の大部分は、美術商などから購入したものである。

d. モリソンの日本語能力

モリソンの自著『日本の絵師』（Painters of Japan）の序文には、加藤章造、富田熊作、小林文七などの日本美術商の名前が記されている。最後に上げた小林文七という浮世絵商については、海外の顧客を訪ねる時通訳として戸川秋骨や上田敏などの英文学者を同行させた。小林文七は有望な若い英文学者などに洋行の機会を与えていたのである。通訳として洋行の機会を得ることができた戸川秋骨は、自著『欧米紀遊二万三千哩』の中で、小林文七の顧客の一人であるアーサー・モリソンに会った時のことを、次のように書いている。

此人は未だ日本に來た事の無いのに拘らず、日本の事情に詳しく、日本の文字杯も無難に読むのには感心した。（中略）某氏とは、アーサー、モリソン氏で、アーサー、モリソン氏とは即ち現英第一流とはいかぬが、第二

流に立つて居る小説家である。^⑤

以上が、英文学者戸川秋骨が浮世絵商小林文七の通訳として、モリソンに会った時の記述である。現在英国で第二流に立っている小説家モリソンは、日本に一度も出かけたことがなかったのに、日本の事情に詳しく日本語の文字などもこともなげに読んだのである。

夏目漱石の後任の留学生として文部省から英国に派遣されたのが、英文学者平田禿木である。その平田禿木も大英博物館のローレンス・ビンヨンを通じて、ロンドンでアーサー・モリソンと親交を結んだ。その平田禿木はモリソンのことを次のように紹介している。

アーサー・モリソン氏はロンドン東端区貧民窟の生活を描いた頗る写実的な小説幾巻かを出して好評を博し、兼ねて劇にも筆を染めてゐた作家であったが、彼地に於て浮世絵のみならず、広く日本画の蒐集を趣味とし、大英博物館プリント・ルーム主任であつた詩人ローレンス・ビンヨン氏と殊に親しく、当時同博物館に出入りしてゐた古筆了任氏（書画鑑定の大家了仲氏の息）を秘書として、『国華』その他日本の文書を研究してゐた人である。^⑥

平田禿木は、また他の著作ではモリソンが「一度も日本に遊んだ事もないのに、洒落れた生粋の日本語を挿むこと、なべての素養ある英吉利人が仏蘭西語でも入れるやうに、適当に可笑しく、心にくい活かし方をされます」^⑦と述べ、また、モリソンが「如何うして英吉利だけで、あれだけの蒐集と研究が出来たらうと驚かれるのです」^⑧とも書いている。いずれにしても、平田禿木はモリソンの日本美術品の収集および日本美術の研究に驚愕し、大変感心しているのである。

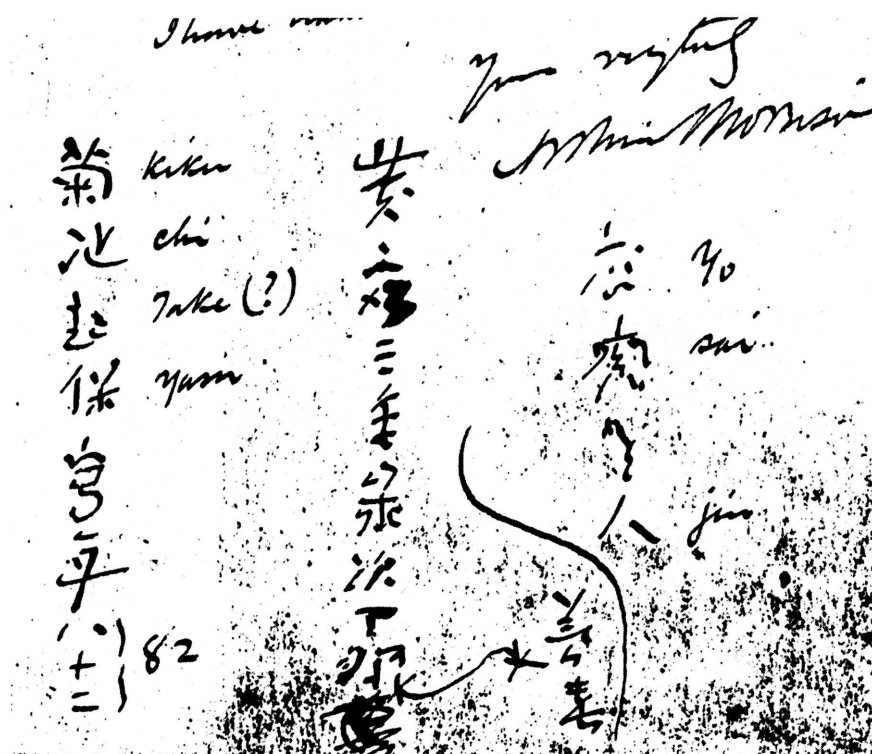


図 5. 南方熊楠宛 Mori ソン 書簡 南方熊楠顕彰会蔵

ではそのアーサー・モリソンの日本語の能力は、一体どの程度のものであったのでしょうか。私はかなり高いものであっただろうと想像する。そのモリソンの日本語能力を示す一つの例として、ここでモリソンがロンドン滞在中の南方熊楠宛に書いた手紙を紹介する（図5）。ご存じのように、南方熊楠は大英博物館図書館を拠点にして、ロンドンで自分の研究・勉強を推進していた。その熊楠とモリソンはある種の“日英交換教授”をしていたのである。たとえば、モリソンは熊楠が書いた英文の論文などをチェックしたり、修正したりした。かわりに、熊楠はモリソンのために浮世絵の詞書きや絵画の落款などを読んでやったのである。熊楠がモリソンのために詞書きや落款などを読解した場合、興味深いのはその方法である。もちろん、熊楠が大英博物館などでモリソンに



図 6. 笙を吹く新羅三郎、源義光

©Trustees of the British Museum



図 7. 同 落款部分

©Trustees of the British Museum

会い、モリソンが持参したものを讀んだこともあったし、また熊楠がモリソンの自宅などに招待され、そこで詞書きなどを讀んだこともあった。それらとは別に、二人は書簡を使用した方法も利用していた。熊楠とモリソンは手紙のやり取りを盛んにしており、モリソンが落款などを熊楠宛ての手紙に自分で書き、モリソンが自分で付けたローマ字によるその読みなどが正しいかどうかを、熊楠に手紙で尋ねているのである。要するにモリソンは草書体の日本語を書くことのできたのである。図5は、1896年（明治29年）4月13日付けのモリソンから熊楠に宛てた手紙である。この手紙に菊池容斎の三点の掛物にある落款などが掲載されている。モリソンは割とじょうずに菊池容斎の落款などを自分の手紙にコピーしている。これらの落款が含まれる菊池容斎の三点の作品について



図8. 鷹狩りをする馬上の公家

©Trustees of the British Museum

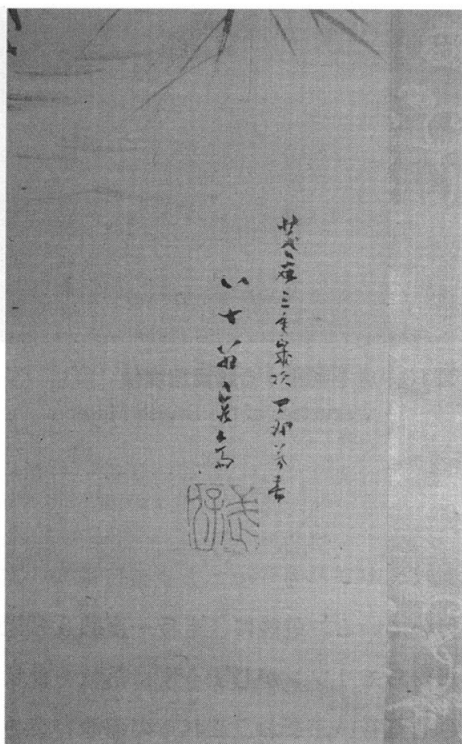


図9. 同 落款部分

©Trustees of the British Museum

は、二点はモリソンが所蔵していたもの、一点は大英博物館のアンダーソン・コレクションに含まれていたものである。それらの菊池容斎の作品の最初は「笙を吹く新羅三郎、源義光」の絵で（図6）、その絵の落款は「菊池武保享年八十二」と読むことができる（図7）。次は「鷹狩りをする馬上の公家」の絵で（図8）、その絵の落款は「慶応三季歳次丁卯冷春、八十翁容斎」と読むことができる（図9）。

最後は「虎を刺殺する膳臣巴提便」の絵である（図10）。その絵の落款は四字あり、最初の二字は「容斎」、後の二字は「老人」と読める（図11）。この絵は、アンダーソン・コレクションに属し、アンダーソン・コレクションの目録には絵そのものは本物の菊池容斎の絵であるが、落款があやしいという注が

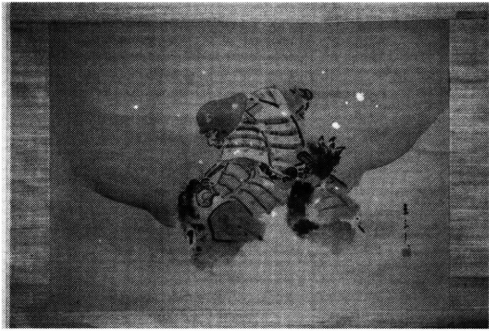


図 10. 虎を刺殺する膳臣巴堤便
©Trustees of the British Museum

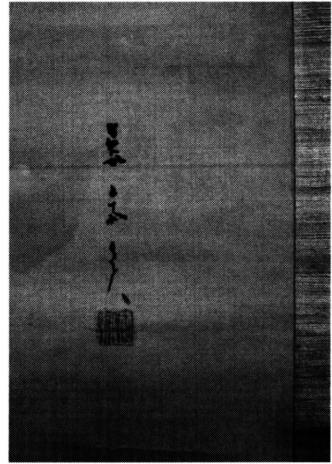


図 11. 同 落款部分
©Trustees of the British Museum

付いている。最後に、もう一度図5と比べていただきたい。このモリソンの手紙からモリソンがじょうずに落款をコピーしており、またモリソンが付けた読みも正しい。なお、これらの菊池容斎の三点の作品は現在大英博物館が所蔵している。菊池容斎については、アーサー・モリソンは1903年に『バーリントン・マガジン』(The Burlington Magazine for Connoisseurs)に詳細な研究論文を発表した^⑨。

アーサー・モリソンはロンドンで石橋和訓などの日本人画家とも交流した。その中で一番親しく交際したのは、日本画家の下村観山である。観山は美術関係では文部省から初めて海外に派遣された留学生で、1903年(明治36年)から1905年(明治38年)まで、約二年間英国に滞在し、水彩画などを学んだ。観山は水彩画に詳しいローレンス・ビンヨンがいた大英博物館を留学の拠点にした。観山は英語があまりじょうずになかったのも、ロンドンではもっぱら日本語がわかるモリソンが観山の世話をしたようである。観山は毎日モリソンの家によばれ、ごちそうになったというような話も伝わっている。そのモリソンは下村観山宛てに英文の書簡を送付したこともあったが、観山宛てに次のよう

な日本文の手紙も送っていた。このモリソンの観山宛ての日本語の手紙から、モリソンの日本語能力がかなり高かったことがわかる。

此の度の御作品は何れも御見事にて、この分にては定めし素晴らしき展览会と相成る可く存じ候。勿論小生だけに委され居りてよきものには無之、小生共は何れかよき画廊の経営者と取極めを致さねばと存じ候に付、この方面に顔広き友人ミーズ（Mease）氏宛一書を差出し、来る月曜日昼食時サベージ倶楽部（Savage Club）にて面談し得るや問合せ申候間、若し実現の節は又御通知致す可く候。

一九〇四年四月六日 アーサー・モリソン^⑩

以上のような観山宛ての日本語の候文の書簡を書くことができたモリソンは、相当に高い日本語能力を持っていたと想像する。

また、画家石橋和訓については、アーサー・モリソン宛てに現在大英博物館に所蔵されている書簡を出している。1906年（明治39年）12月頃の手紙で、和訓が南画系の谷文晁、椿椿山、滝和亭などの絵を模写したものをモリソンに贈与することを伝えている。この手紙の翻刻文は以下のようであろう（図12）。

謹啓仕候、御尊堂様益
御多祥之段、奉大慶候、
陳者、過日ハ御邪ま申上、色々
御手厚御取成に預り、難有候、
御礼申上候、其後ハ御見事之
スモンド先生之御筆御送与被下、
難有存候、永く老後迄之観
楽と可致候、偕而又御約足之

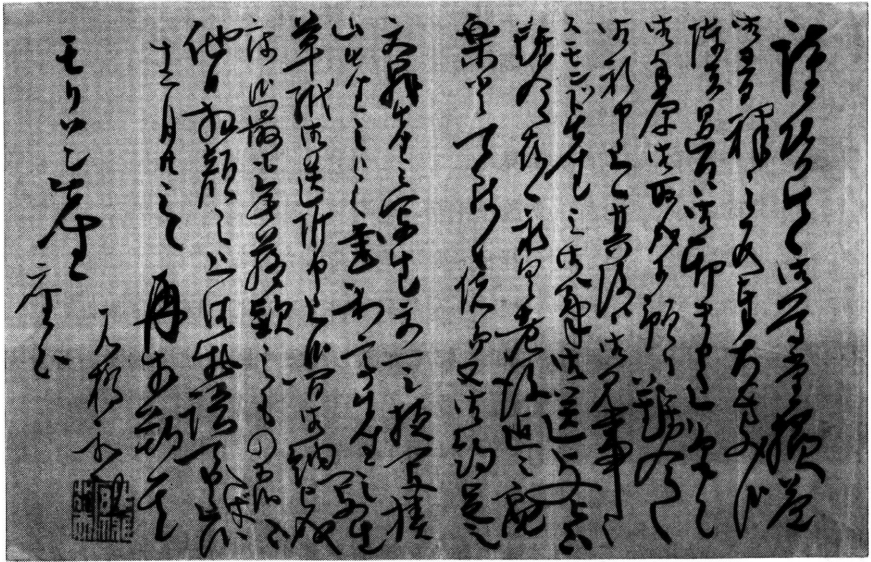


図 12. モリソン宛石橋和訓書簡

©Trustees of the British Museum

文晁先生之写生、文一之拔写、椿
山先生之らく書、和亭先生之写生
草紙御送附申上候間、御納被成下
度候、最も無落款之ものに候へば、
他日拝顔之上御物語可申上候

再拝頓首

十二月廿三日

石橋和訓（方印）

モリソン先生

座下

アーサー・モリソンがこのような石橋和訓からの手紙を読むことができたのであれば、モリソンの日本語読解力は相当高かったに違いない。和訓が手紙で言及した絵（掛物）も現在大英博物館に所蔵されている。石橋和訓の手紙および

掛物はアーサー・モリソン・コレクションの一部として大英博物館に収納された。

アーサー・モリソンについては、最後に南方熊楠が書いたものをご紹介します。熊楠が大正三年に柳田国男宛てに送った書簡で、アーサー・モリソンについて言及しているので、その部分を引用する。南方熊楠は日本におけるブリタニカ百科事典の購読者の一人であり、その熊楠が受け取ったブリタニカ百科事典第11版に、モリソンの伝記が掲載されているのを発見して、大変びっくりしている。ケンブリッジ大学出版会から出版されたブリタニカ百科事典第11版は、イギリスで編集された最後のブリタニカで、英国では一番いい版とされている。

小生在英のころ、アーサー・モリソンという人と交わり厚し。小生大英博物館で大喧嘩し抛り出されたとき、即日、南ケンシントン美術館へ世話して技手にしてくれた人なり。小生、毎々動物園へつれゆき動物の講釈するに、その礼なりとて、サベージクラブで饗応さる。往って見ると、昨日小生座りし処に、プリンス・オヴ・ウェールズ（今より見れば、前皇エドワード七世）坐し、当日このクラブへ招きし北氷洋探検家ナンセンに頼み、小生の眼前なる柱に小刀でその名をきりこませたりとて示さる。小生何のことやら分からず、モリソンごときつまらぬものが英皇と等しくこのクラブ員たること合点行かざりし。しかるに、一昨々年新板の『大英類典』を見るに、従来例を破り、まだ死なぬ人もよほど高名な人は伝を出すことにしあり。その内にモリソン伝短くながらあり。よほど有名な小説家と見えたり。小生と三年ばかり親交し、小生毎々その宅へ歌麿の浮世絵などの詞書をよみやりに行きし。しかるに、この人一語も自分のことはいわず、ただわれはもと八百屋とかの丁稚なりし。外国語は一つ知らず、詩も作り得ず、算術だけは汝にまけずと言われしのみなり。小生誰にも敬語などを用いぬ男なるが、ことにこの人の服装まるで商家の番頭ごときゆえ、一切平凡扱いにせし。只今『大英類典』に死なぬうちにその伝あるを見て、始

めてその人非凡と知れり。^⑪

以上が南方熊楠が書いたモリソンとの交友の回想である。熊楠が書いていることには虚偽はまったくない。皇太子時代のエドワード七世も北氷洋探検家ナンセンもモリソンと同じように、サベージ・クラブの会員であった。他の資料からナンセンが柱に自分の名前を彫刻した話も本当であったことがわかる。皇太子時代のエドワード七世は、ロンドン市議会がイースト・エンドの貧民窟跡に建設した団地の開所式で演説し、わざわざモリソンの小説に言及している。エドワード七世も同じサベージ・クラブの会員として、モリソンのことは知っていたのである。ただ、熊楠がモリソンの言い分として書いた部分の中に、一つだけ間違いが含まれている。モリソンは自分は外国語を一つも知らない謙遜しているが、実際にはアーサー・モリソンは相当程度の日本語能力を習得していたのである。

アーサー・モリソンについてはすでにお伝えしたように、1906年（明治39年）に二千点近い彼の浮世絵のコレクションが大英博物館に収蔵された。1911年（明治44年）には『日本の絵師』（Painters of Japan）を刊行した。また、モリソンが収集した五百八十九点の日本の絵画なども1913年（大正2年）に大英博物館に収納された。ただ、後年のモリソンは、作家としても、また日本美術研究者として比較的早く忘れさられた様子である。また第一次世界大戦に従軍した一人息子も1921年に亡くし、その後は、モリソンは妻と二人でロンドンでさびしい生活をしていた。下村観山が英国留学中に三男が生まれたので、観山はその三男に英国にいる時生まれたという意味で英時という名前を与えた。その下村英時は1926年（大正15年）にロンドン在住のモリソンを訪問し、観山からの贈り物として、モリソンに鎌倉時代の仏画を贈呈した。観山からの贈り物に大変喜んだモリソンは、自分が非常に大切にしていた『トビアスの伝説』という珍しい油絵を、観山に寄贈した。『トビアスの伝説』は、オランダの十七世紀の画家コルネリス・ヴァン・プーレンブルグ（Cornelis van

Poelenburgh) の作品である。秘蔵品の『トビアスの伝説』を観山に譲ることからもわかるように、モリソンにとっては下村観山の息子の訪問と観山からの贈り物は大変うれしいものであったに違いない。

ここで、アーサー・モリソンとアーサー・ウェイリーとの関係について簡単にお話する。二人は大英博物館やローレンス・ビンヨンなどを通じて顔見知りであったことは想像できる。ただ、アーサー・モリソンとアーサー・ウェイリーは世代が異なり、また詩人肌のウェーリーに対して、モリソンはどちらかといえば散文的であったので、ほとんど交際らしきものはなかったかもしれない。ただ、今回の話で私がお伝えしたかった点は、次のことである。アーサー・ウェイリーが源氏物語を翻訳し、日本文学が本格的に英国に紹介される前にも、アーサー・モリソンによる日本美術研究のような大英博物館を中心とする日本研究が英国には存在したという点である。そのことが直接的ではないにしても、ある意味では間接的にウェイリーなどによる本格的な日本文学の紹介の前段階になっていたという点である。ウェイリーのよる『源氏物語』の翻訳は画期的なものであったが、私は英国にはそれ以前にもアーサー・モリソンなどによる日本研究がすでに存在していたという点もそれなりに重要であったと考える。

最後に、ロンドンでアーサー・ウェイリーに日本語を教えた日本人について言及してみたい。いわば、アーサー・ウェイリーにとって南方熊楠や平田禿木などにあたる人物はだれであったのかを詮索してみたい。八木アンテナの発明者、大阪帝大総長などとして有名であった八木秀次は、ロンドン留学中、1914年（大正3年）11月14日付けの『タイムズ』の「Personal」という欄に、「日本の紳士が無料で日本語学習のお手伝いをする」という、以下のような広告を出す。

JAPANESE GENTLEMAN is willing to give gratuitous assistance to one learning Japanese—Y., 85, St. Stephen's avenue, Shepherd's bush.¹²⁾

当時、八木が住んでいたロンドンの住所が「85 St. Stephen's Avenue, Shepherd's Bush」であった。その八木の広告に応募してきたのがアーサー・ウェイリーであった。ウェイリーは八木秀次が翌1915年（大正4年）に留学先をアメリカ合衆国に変更するまで、八木から日本語を教えてもらった。そのウェイリーは八木から日本語の教授を受ける以前には、やはり英国留学中の坪内士行から日本語を教えてもらっていた。坪内士行は坪内逍遙の甥（養子）で、1911年（明治44年）から1915年（大正4年）5月まで演劇修行として英国に留学した。さらに、アーサー・ウェイリーが交際した日本人としては、美術史家矢代幸雄、英文学者斎藤勇などがいた。八木秀次、坪内士行、矢代幸雄などがウェイリーにとっては、アーサー・モリソンの南方熊楠や平田禿木に相当する日本人であろう。

【注】

- ①Basul Hall Chamberlain, 'Notes by Motoori on Japanese and Chinese Art', *Transactions of the Asiatic Society of Japan*, Vol. 12, Pt. 3 (1884).
- ②山名格蔵『日本の浮世絵師』第一書房 1930. p. 5.
- ③Clarence Rook, 'Arthur Morrison', *The Chap-Book*, Vol. 7 No. 7 (1897).
- ④Kennedy Williamson, *W.E. Henley: a Memoir*, London, 1930. p. 144.
- ⑤戸川秋骨『欧米紀遊二万三千哩』服部書房 1908. pp. 191-192.
- ⑥平田禿木『西人の浮世絵観』七丈書院 1942. pp. 2-3.
- ⑦平田禿木「アーサー・モリソン」『英語青年』Vol. 26 No. 10.
- ⑧平田禿木「モリソン氏の新著」『英語青年』Vol. 26 No. 12.
- ⑨Arthur Morrison, 'Kikuchi Yosai', *The Burlington Magazine for Connoisseurs*, Vol. 3 No. 8.
- ⑩下村英時『下村観山伝』大日本絵画 1981. p. 103.
- ⑪『南方熊楠全集 8』平凡社 1972. p. 437.
- ⑫*The Times*, 14th November 1914.